

# 《*Experientia*》の系譜とデカルト

—デカルト的「経験」概念の特性を究明するための予備的考察—

田 村 歩

## 1. 問題の所在

本稿の目的は、その表題のとおり、デカルト<sup>(1)</sup>の「経験」概念が有する特性を究明するための端緒を拓くことである——なぜこの概念の規定が必要となるのか。それは、「直観」や「演繹」<sup>(2)</sup>といった他の認識的作用が初期の著作『精神指導の諸規則』（以下『規則論』と略記）以降次第に使用されなくなっていくのに反して、「経験」は、『省察』および「反論と答弁」・『哲学原理』・『ピュルマンとの対話』・『真理の探究』でも継続的に、しかもコギトや自由意志というデカルト哲学の根幹をなす主題において使用されているというテキストの事実（*Med.*, AT-VII, 49; *ibid.*, 56; *2ae Resp.*, AT-VII, 140; *5ae Resp.*, AT-VII, 358; *6ae Resp.*, AT-VII, 427; *P.Ph.*, AT-VIII, 19-20; 33; *Ent. Burm.*, AT-V, 147; 163; *R. V.*, AT-X, 524.）を考慮してのことのみではない。一般的に、ある事物を認識の対象とするとき、いかなる手法に依拠するか——たとえば、肉眼か拡大鏡か——によって獲得される知は異なりうるのであるから、ある事物を究明しようとする場合には、主体が依拠するその手法の何たるかが明確にされていなければならない。具体的にいえば、デカルトは〈私〉の思惟や存在、自由意志を「経験によって」確証するが、しかし、「自身のうちで、自身が存在するのでない限り思惟することはありえないと経験する」（*2ae Resp.*, AT-VII, 140.）や「自分自身のみを顧慮する場合、意志的であることと自由であることが一つの同じものであるということを経験しない者はいない」（*3ae Resp.*, AT-VII, 191.）という記述に現れる「経験」が何を意味しているのかを精確に把握していなければ、それら（＝思惟・存在・自由意志）の確実性の根拠を究明することは不可能である。しかしデカルトは、「経験」という概念について一切の規定をすることなく、しかも、それ以前の伝統的な用法から逸脱するような仕方でもこれを使用しているのである。このような事情を踏まえるならば、デカルトの哲学体系における「経験」の特性を明確化し、それがいかなる機能を有しているのかを究明するこ

とが、デカルト哲学研究にとって喫緊の課題であると思われる。

本稿は、この課題を将来的に展開するための準備として、デカルト的「経験」概念の、デカルト以前の哲学史における位置づけを明確化することを試みる。以下では、第一に、デカルト以前における「経験」の用例および用法について概観し、第二に、それをデカルトと対照し、第三に、デカルト的「経験」に関する先行諸研究を整理し、最後に、それまでの分析および考察から得られる展望を提示する。

## 2. 基礎的作業

### 2-1. デカルト以前

周知のように、哲学において「経験」という概念は古代より重要な地位を占めてきた。たとえばアリストテレス——W. H. HEINEMANN の「経験の定義に至った最初の人物はアリストテレスであると考えられる」<sup>(3)</sup>という見解の是非<sup>(4)</sup>は省くにせよ、少なくとも彼が学問において「経験」という方法を重視した最初期の哲学者の一人であることは明白である——は、「経験」について、「他の諸動物は表象や記憶で生きているが、経験を具有するものは極めて稀である。[...]ところで、経験が人間に生じるのは記憶からである。[...]学問や技術は経験を介して人間にもたらされるものである。[...]技術が生じるのは、経験の与える多くの心象からいくつかの同様の事がらに関する一つの普遍的な判断が作られたときにおいてである」(ARISTOTELES, *Metaphysica*, I, i.) と主張する。つまりアリストテレスにおいて、感覚によって与えられた複数の知覚は、記憶として集積していき、それが適切に分類され、同一の事物に関する一つの「経験」へと昇華されるのであり、そしてその「経験」から学問および技術が生じるのである。P. GREGORIĆ および F. GRGIĆ のことばを借りれば、アリストテレス的「経験」とは、「知覚および記憶という非理性的な認識能力と、技術および学問という理性的な認識的態勢とのあいだの間隙を埋める」<sup>(5)</sup>ものであるといえるだろう。

そして彼の影響を強く受けている中世哲学においても、「経験」とはやはりアリストテレス的なそれであった——アルベルトゥス・マグヌスによれば、「経験とは、繰り返された記憶から受け取られる個別的なもの [について] の認識である [*experientia est cognitio singularium ex multiplicatis accepta memoriis [...]*]」(ALBERTUS, *Metaphysica*, I, i, 9.) が、これが獲得されるためには、三つの独立した心的出来事が必要となる。すなわち、(1) あるものについての印象をもつこと、(2) そのあるものと類似した別のものについ

での印象をもつこと、(3) 先の二つの印象——このうちの少なくとも一つは記憶から想起される——を、理性によってのみ生じうる普遍なるものの事例たるべく方向づけるという作用、である。アルベルトゥスにおいて、一方で、この「方向づける [tentio] という行為」は経験の形相的な構成要素であり、他方で、想起された印象はその質料であるとされる<sup>(6)</sup>。またアルベルトゥスを師としたトマス・アクィナスも、『神学大全』において、「私たちのうちに経験が存するのは、私たちが感覚によって個々を認識する限りにおいてである […]」<sup>(7)</sup>や「これら (= 個別的な事がら) の記憶や経験は、彼はこれを、感覚を通じて獲得する […]」<sup>(8)</sup>と述べているように、「経験 [すること]」とは基本的に、「感覚を通じて個別的なものを認識する」こと、「多くの記憶から生じるもの」というアリストテレス由来のものなのである。そして「経験」が「感覚」を起源とするものである以上、それが形而上学において主要な方法とされることはなかった。この点はドゥンス・スコトゥス『命題集註解』<sup>9</sup>において明確に現れており、彼はそこで以下のように述べている。

「しかし、三段論法の結論の位置に置かれる命題の経験が得られる場合があることに注意しなければならない。たとえば、月にはしばしば陰りが生じる。この場合、この結論を認めて、その結論の原因を分割の道によって探究する。そしてこの経験されている結論から自明の原理に達する場合がある。そのときには、かつて経験的にのみ明らかであった結論が、自明な原理から導かれた結論として、認識の第一のものとして確実に知られる。たとえば、「明るく照らされるものと、光を放つものとの間に置かれた不透明なものは、明るく照らされるものに対する光を妨げる」という命題は自明である。そして分割の道によって、地球が太陽と月との間に置かれた物体であることが見出されるなら、それは最も確実な論証という根拠によって知られるということになるだろう。そしてそれは原理の発見以前に結論が知られていたような仕方、単に経験によって知られているだけではもはやないのである」(SCOTUS, *Ordinatio*, I, iii-1, part 1, q. 4.)

スコトゥスによれば、「三段論法の結論の位置に置かれる命題」が「経験」によって先に知られている場合、その結論から遡ってその原理を探究することで、全体で一つの確実な論証とみなすことができる。すなわち、一方では結論としての経験命題から遡ってその前提たる「自明の原理」が得られ、他

方ではそのように事後的に得られた「自明の原理」が先の経験命題の確実性を保証する、ということである。そしてこのことから、あるものが「経験」によって知られる場合と「原理」[からの演繹]によって知られる場合とで、それが同一のものであっても、その確実性には差異があるとみなされていたということが解る（前者は「単に〔経験によって知られる〕」といわれ、後者は「第一のものとして確実」といわれる）<sup>(10)</sup>。すなわち、「経験」的知は原理からの演繹的知に劣るとされているのである。

さらに、「経験」が感覚と記憶とから生じるものであるという理解は、デカルトの愛読書であったミシェル・ド・モンテーニュ『エッセー』<sup>(11)</sup>においても認められる。その第三巻の「経験について [De l'expérience]」と題される第十三章では以下のように述べられている。

「ものを知りたいという欲望ほど自然なものはない。私たちは、知識へと導いてくれそうなあらゆる手段を試みる。そして、理性で足りなければ、経験をも使用するのだ——「経験は、様々な実践を通じて技術を生んだ。実例が道筋を示してくれたのである」(MANILIUS, *Astronimica*, I, 61-62.)。たしかに経験は、理性に比べれば遙かに非力で卑俗である。しかし、真理とは非常に偉大なものなのだから、私たちをそこへ導いてくれるならば、いかなる手段をも軽視してはならない」(DE MONTAIGNE, *Essais*, III, xiii, 1065.)

このようにモンテーニュ的「経験」も、ギリシャ古典が引用されている——冒頭はアリストテレス『形而上学』からの借用である——ことから、またその具体例として挙げられているのは卵や鶏の類似性ないし差異の識別の〈技術〉についてである<sup>(12)</sup>ことから解るように、理性と対置されかつ実践や技術と関係づけられるところのアリストテレス由来のそれであるといえる。またモンテーニュは「経験から引き出しうる成果がいかなるものであれ、現に私たち自身の経験をほとんど活用できていないからには、外部の事例から経験を引き出してきても、私たちを教えるのにあまり役立ちそうにない。本来、私たち自身の経験は、より身近なものであって、必要なことを教えるのに充分なはずであるのに。私は他の主題にもまして、自分自身を研究する。これが私の形而上学であり、また自然学であるのだ」(*ibid.*, 1072.) とも主張しているが、この「私たち自身の経験 [celle (= expérience) que nous avons de nous même]」は後述のデカルトとの接点を一見示しているように思わ

れるものの、しかしながら、彼が念頭に置いている〔そして実際に記述している〕のはとりわけ医学<sup>(13)</sup>であり、この場合の「私たち自身の経験」とは、「技術や学説」や「医者」に頼ることなく自らの健康を維持するために使用される——それゆえ身体的・感覚的である——ものなのであり、また「習慣」を形成する——それゆえ記憶に依拠する——ものであるといえるだろう。

## 2-2. デカルト

それでは、以上の伝統的用法の系譜に対して、デカルトはどのように位置づけられるのか。結論から述べるならば、デカルトにおいても〈感覚を介するもの〉や〈記憶から生じるもの〉という伝統的な意味での経験は見出されるが、しかし、それだけに包摂されないデカルトに固有の意味での経験もまた確認される。まずは伝統的な意味でのそれについてみていこう。

『方法序説』において「経験をを得る」や「経験を積む」(D.M., AT-VI, 10; 22; 28.)といわれるときの経験は、学問や技術をもたらしどころの、記憶から生じる経験に該当する。17世紀の哲学史および科学史に造詣の深いD. CLARKEの基礎的研究によれば、これは、環境や習慣の幅広い多様性に対処する能力、すなわち「ある種の常識的知恵 [a kind of common sense wisdom]」<sup>(14)</sup>のことであり、明確に知的であるとも感覚的であるとも限定できないような漠然とした資質——「実践的な選択を正しく行うための、行動様式に容易に従うための、そして自身の共同体で受け入れられている意見を適切に批判するための習慣的な態勢」<sup>(15)</sup>——である。この種の経験は「自らの行為をみて、確信を以てこの人生を歩むために、真と偽とを区別することを学ぶ」(ibid., 10.)のために必要とされるが、これらは、デカルトに、前例と慣習とだけで納得されてきたものを過信しないこと、多くの人手によって作られたものは一人によって作られるものほどの完成度はないこと、即断と偏見とを回避することを学ばせるのである。

またデカルトにおいて「経験」は、感覚という意味でも使用される——人間は心臓の熱、痛み、様々な〔生理的〕欲求、そして可感的対象の諸観念を感じ [sentir]、また同様に、近くの対象から遠くの対象へと焦点を合わせるときに眼の筋肉の運動を感覚するとき、これらのことは「経験によって [par expérience]」知られるのであり、この種の経験は、デカルトが「感覚の経験 [l'expérience des sens]」と呼ぶものである。デカルトは、『方法序説』において「様々な観察を重ね、多くの経験を積み、それらを、後になってより確実な意見を打ち立てるのに役立てた」(AT-VI, 29.)と述べているように、

実際に、物体には多くの孔があること (*La Dioptrique*, AT-VI, 87.)、地球上で観察される物体のあらゆる運動は円運動であること (*Le Monde*, AT-XI, 19.)、重さをもつ物体は地球の中心に向かって降下していくこと (*Principes* [Préface], AT-IX-2, 8.) といった様々な言説を経験によって保証しているが、このような経験とは「感覚」を意味しているのである<sup>(16)</sup>。

これらの経験は、すでに『規則論』において「事物についての経験はしばしば誤りを犯す」と述べられているように、主体をして「前例と習慣とだけで納得してきたことをあまり堅く信じるべきではない」(*D.M.*, AT-VI, 10.) ことを、また「感覚はときに欺く」(*ibid.*, 32) ことを学ばせるのであって、形而上学の構築に益する確実性を与えるものではない<sup>(17)</sup>。しかしデカルト的「経験」概念は、上記の〈感覚を介するもの〉や〈記憶から生じるもの〉という伝統的な意味においてのみならず、むしろ、感覚にも記憶にも依拠せず、方法的懐疑が最も先鋭化される『省察』においても、コギトや自由意志の確実性を保証しうるものとして使用されているのである。敷衍しよう。

最も用例が多いのはいわゆるコギト論であり、〈私〉の存在および本性は「経験」によって知られるということが随所で主張されている。周知のように、コギトが三段論法による一般命題からの演繹ではないということはデカルトの一貫した主張であって、その真理性は、自らが自らのうちでなす「経験」によって保証される。晩年の著作『情念論』を起点としてデカルト形而上学を解釈した研究で世界的に知られる D. KAMBOUCHNER によれば、コギトについて第一に生じるのは「思惟するためには存在しなければならない」といった一般的命題ではなく自らの「経験」であり、これによって〈私〉の思惟と存在との連関が知覚されるのである<sup>(18)</sup>。この点については、各用例において明確に表れている——「しかし、むしろ彼 (= 「私は思惟する、ゆえに私は存在する」と語る者) はまさしく彼の存在を、彼自身のうちで、自身が存在するのでない限り思惟することはありえないと経験することから学び知る」(*2ae Resp.*, AT-VII, 140.)・「自身のうちにおいて省察する精神は、自らが思惟することを経験できる」(*5ae Resp.*, AT-VII, 358.)・「私たちは、常に、私たち自身のうちにおいて、自らが思惟することを経験しないということはありえない」(*6ae Resp.*, AT-VII, 427.)・「もとより私は、「私は思惟する、ゆえに私は存在する」というように、私自身のうちで経験するものだけに私は注意を向けるのであって、そのように「すべて思惟するものは存在する」という一般的な知見に注意を向けるのではない」(*Ent. Burm.*, AT-V, 147.)・「さらにつけ加えると、これらのもの (= 存在、思惟、懐疑) はそれ

自体によってでしか知られえず、それらについては、私たち自身の経験や、各人がこれらを検討するとき自らの中で経験するところの意識ないし内的証言によってでなければ納得することができない」(R.V., AT-X, 524)。

また、意志の自由も「経験」によって知られるとされる。〈私〉は、意志が「いかなる限界によっても局限づけられていないということを経験」(Med., AT-VII, 56.)し、「ただ意志、いうなら意志決定の自由のみ」を「それ以上に大なるものの観念を私が把握することのないほどに大なるものであることを自らが自らのうちで経験する」(ibid., 58.)のである。そしてこの「経験」は、「十分に広大で完全な意志、いうなら意志決定の自由を神から授からなかったことに不平をいうこと」(ibid., 56.)を封じるほどに、デカルトにおいて信頼に足るものである。さらにこれは後の『哲学原理』において「最初の、かつ最も共通的な概念に数え」(P.Ph., AT-VIII, 19-20.)られ、その根拠は、「それ(=ある最も強力な私たちの創造者があらゆる仕方であつたことを欺こうと試みているという想定)にもかかわらず、完全には確実でなかったことを信じるのを拒みうる自由が私たちのうちにあることを経験したから」(ibid.)であるとされる。

\*

さて以上の諸用例を概観するとき、それらの「経験」は、〈感覚を介するもの〉や〈記憶から生じるもの〉とはみなされえないと考えられる。それらはむしろ、外的／感覚的ではなく内的／反省的、また記憶による持続的なものではなく一回的なものであって、感覚や記憶を排除してもなお、〈今この瞬間に〉自らのうちに生起しているということが不可疑であるところのものが「経験」として彼の形而上学を構築しているのである。また、アリストテレス的「経験」が、同一の事がらに関する事例が増加するのに従ってその確実性——蓋然性とする方が適切であろう——も増大していくと考えられる一方で、デカルト的「経験」は、「私は思惟する」という経験に顕著だが、事例の増加に従って確実性が増大することはない。ひとたび「私は思惟する」という経験が自らのうちで得られたならば、その後それを何度繰り返したとしても、確実性の度合いに変化はなく、であるからこそこのような「経験」は、「第一原理」とされるコギトの真理性を保証することができるのである。

そして、16世紀あるいは17世紀に編纂された各ラテン語辞書を参照することによって、また当時の第三者によるフランス語版『省察』および『哲学原理』を参照することによって、上記の「経験」のデカルト的用法が、彼の

時代において特異的であったことが推察される——デカルトの死後間もなく刊行されたミクラエリウス『哲学的辞書』（1653年）では、「経験とは、多数の個別的で〔相互に〕類似するものによって構築される一般的な知識である〔*Experientia est ex pluribus singularibus cognatis scientia universalis exstructa*〕<sup>(19)</sup>と、同じくマルティーニ『文献学的辞書』（1655年）では、「〔経験とは〕第一に、感覚のことであり、第二に、観察のことであり、第三に、経験のことであり<sup>(20)</sup>、第四に、帰納のことであり、またそれゆえ〔帰納によって導出される〕一般的な規則のことである〔*Primo est sensus, secundo observatio, tertio experientia, quarto inductio, hinc generalis regula.*〕<sup>(20)</sup>と、さらに、17世紀後半に編纂されたショヴァン『理性的辞書』（1692年）では、「経験とは、実践〔ないし習慣〕によって生じるところの、誰が教えるわけでもないある種の認識である。自然学においてのみ〔各人は〕〔経験を〕もつが、ただ必然的にそうするのである。なぜなら、経験をもたない理性は、操舵手がおらずに揺れ動く船に等しいからだ〔*Experientia est quaedam cognitio nullo docente, per usum contingens. In Physicis tantum obtinet, sed & necessario obtinet; est enim ratio sine experientia velut navis sine rectore fluctuans.*〕<sup>(22)</sup>と説明されているように、自然学の観点からの記述はあるが形而上学からの観点の記述はみられないし、また16世紀後半に編纂されたゴクレニウス『哲学的辞書〔*Lexicon Philosophicum*〕』（1590年）ではそもそも「経験」の項が設定されていない。これらの辞書は、デカルトの死（1650年）をほぼ中心とする100年間の、すなわち16世紀から17世紀末までの〔哲学的概念としての〕「経験」の様相を表しているといえるだろう。

また、フランス語版『省察』（「諸答弁」を含む）および『哲学原理』では、ラテン語原典における「経験〔する〕」が適宜全く異なる語に置換されており、①「〔私が自身を継続的に存在させうる力をもっているとすれば〕疑いもなく私はそれを意識していることであろう。しかし私は何らそのような力があることを経験することはない〔*... ejus proculdubio conscius essem. Sed & nullam esse experior*〕（*Med.*, AT-VII, 49.）が「〔私が自身を継続的に存在させうる力をもっているとすれば〕私は少なくともそれを思惟し、また認識していなければならぬだろう。しかし私は自身のうちでそれについて何も感じることはない〔*je devrais à tout le moins le penser, & en avoir connaissance; mais je n'en ressens aucune dans moi*〕（AT-IX-1, 39.）と、②「自身のうちで、自身が存在するのでない限り思惟することはありえないと経験する〔*apud se experiat, fieri non posse ut cogitet, nisi existat*〕（*Zae*

Resp., AT-VII, 140.) が「自身のうちで、自身が存在するのでない限り思惟することはありえないと感得する [il sent en lui-même qu'il ne se peut pas faire qu'il pense s'il n'existe]」(AT-IX-1, 110-111.) と、③「私たちが自身のうちで経験するすべての思惟の様態は、二つの一般的なそれに帰着されうる [omnes modi cogitandi, quos in nobis *experimur*, ad duos generales referri possunt]」(P.Ph., AT-VIII, 17.) が「私たちが自身のうちで気づくすべての思惟の様態は、二つの一般的なそれに帰着されうる [toutes les façons de penser que nous *remarquons* en nous, peuvent être rapportées à deux générales]」(AT-IX-2, 39.) と、④「このような自由が私たちのうちにあることを経験した [*hanc in nobis libertatem esse experiebamur*]」(P.Ph., AT-VIII, 20.) が「私たちは極めて大きな自由を自身のうちで知得した [nous *apercevions* en nous une liberté si grande]」(AT-IX-2, 41.) と、⑤「私たちは、対象のうちに存すると私たちが想定するところの色と、感覚のうちで経験される色とのあいだの類似性を知解しえない [*nec ullam similitudinem intelligere possimus, inter colorem quem supponimus esse in objectis, & illum quem *experimur* esse in sensu*]」(P.Ph., AT-VIII, 34.) が「私たちの理性は、対象のうちに存すると私たちが想定するところの色と、私たちの感覚のうちに存する色とのあいだの類似性を私たちに知覚させはしない [notre raison ne nous fasse apercevoir aucune ressemblance entre la couleur que nous supposons être en cet objet & celle qui est en notre sens]」(AT-IX-2, 58.) と、それぞれ変更されている。このような変更は、「*conscientia*」という語について一部の研究者たちが、デカルトの仏訳者たちがこれを全く別の語で置換しているということを、当時はそれがいわゆる「意識」という意味を未だ有さなかったことの証拠としているように、「*experientia*」のデカルトの用法が当時の仏訳者たちには異質に映っていたことを示唆していると考えられる。

### 3. 先行研究

それでは、先行研究はデカルト的「経験」概念をどのように扱ってきたのか。既述のとおり、英語圏においては CLARKE の基礎的研究以降、「実験 [experiment]」と称される自然学におけるそれを主題的に扱った研究が大半であり、当該問題はフランス語圏の研究が牽引してきたといえる。

パリ第四大学名誉教授であり近世哲学史を専門とする N. GRIMALDI は、デカルトにおける「経験」を「自然学的経験 [expérience physique]」<sup>(23)</sup> およ

び「形而上学的経験 [expérience métaphysique]」との二つに区分する。前者は、外的事物について受容されるものであり、「感覚によって知覚する一切のもの、第三者が語ることから聞き知る一切のもの、そして一般的に、外部から人間知性に到達する一切のもの」(Regulae, AT-X, 422.) から得られるといわれている。後者は、知性が「自らについての反省的観想」(ibid.) から受容する一切のものであるが、知性が反省的に観想するものとは、生得観念および第一原理によって構成されるところの、自らに固有の本性であり、その生得観念は「直観」によってそれ自身で直接に知られる単純本性である。そしてこのような観念についての「直観」は、「思惟の経験」ないし「真理の形而上学的経験」と定義されうるといわれている<sup>(24)</sup>。

このような区分はそれ以降の研究にも継承されており、意識や経験の概念に焦点を当てたデカルト研究で知られる P. GUENANCIA<sup>(25)</sup> もまた、「経験」の二つの型式を区別する必要性を指摘している。それはすなわち、「精神が、自らのうちで見出すものについて成すもの」および「物質的、自然的、身体的な事物について成されるもの」である。前者の型式の経験は「精神が自らから離れることなく、自らのうちでその存在を経験しうるところの事物」から成り、これは「～を試す：事物や出来事を証明・論証する」という意味のラテン語である « *experiri* » に対応しているといわれており、また、「自らのうちでそれを認識するようあらかじめ定められた精神にとって不可欠であるところの […] 知性の次元における本性の把握・知覚として現れる」ともいわれている（また直接的な経験とは、「デカルトが直観と呼ぶところの行為によって、精神が事物そのものについて成すもの」とされる）。後者の型式の経験は「[…] 感覚的であろうとなかろうと、形而上学的に確實でありうるといふ代わりに、少なくとも実際上は確實な知識という地位を得るところの仮説を検証するために選ばれた諸現象から成るもの」であり、これに適した用語は「実験 [expérimentation]」であるとされる。

そして「精神が自らのうちで見出すもの」に応用される前者の経験と、「それ (= 精神) が自らの外で見出すもの」に適応される後者の経験との相違は、デカルトのいわゆる〈動物機械論〉で明白に認められる——「第五答弁」では「自身のうちにおいて省察する精神は、自らが思惟するということを経験することができるが、しかし、動物もまた思惟するか、あるいは思惟しないかについては、それ (= 経験すること) ができないからであり、むしろ精神は、このことを後になって動物の作用からア・ポステリオリに探査する〔ことよってのみ見出す〕にすぎない」(5ae Resp., AT-VII, 358.) と述べられ

ているが、デカルトは決して〈動物は思惟しない〉という断定的な判断はしておらず、彼が認めたのは、動物について観察されたものの中で精神に動物が思惟すると判断させるにたるものは一切ない、ということだけである。なぜなら、動物は思惟しないということが確実であると知られるためには「*experiri*」の意味での経験が必要であるが、しかしそれはその本性上、〈私〉の思惟については可能であっても動物の思惟については不可能であるからだ。つまり、現象（ここでは動物の諸行動）についての科学は、「*experiri*」の意味での経験の特徴づける確実性には到達しえないのである。

さらに KAMBOUCHNER<sup>(26)</sup>も、デカルトの「経験」には少なくとも二つの意味があるという。これは一方で、明晰判明であるものとして——そしてその限りで——知性が知覚するところの一切のものという意味で使用される。精神は、神の無限性や、感覚知覚を物体以外のものに関係づけることの不可能性を経験するように、思惟する限りにおいて自らの固有の存在の必然性も経験するのであり、『規則論』で与えられる意味でのあらゆる明証性、あらゆる知的直観とは、対象の十全なる経験である。そしてこの経験は常に、事物がそのようであることの必然性の経験、あるいは事物がそれ以外であることの不可能性の経験であって、「知解する [*entendre; intelligere*]」ことと「経験する [*expérimenter; experiri*]」こととは同義なのである<sup>(27)</sup>。

またこれは他方で、「物体について感覚によって得られるあらゆる情報」という意味で使用される。しかしこのような意味での経験は、複合的な問題を扱うために有益で適切な所与を構成するが、いかなる自律性も有さず、精神が探究する知を直接もたらすものではない。そして KAMBOUCHNER によれば、デカルト自然学の原理が依拠するのは、第一の意味での経験である。神の観念は、神が創造したところの物質にひとたび運動が与えられれば、神はその運動の総量に何らの足し引きもしない、ということを認識させ、個々の物体の運動が、それを取り巻く諸物体の運動によって方向や速度がすぐに変更されてしまうにもかかわらず、知性はこの運動量が自然においてどのように保存されるのかを測定することができるのである。従って、『哲学原理』第二部で提示される三つの自然法則を精神に確信させるのは「知的経験 [*une expérience intellectuelle*]」である、と主張されている。

\*

以上の先行研究を概括するならば、デカルト形而上学における「経験」は、従来、「直観」や「知解」といった他の知的作用と同一視される傾向にあったことが解る。しかし管見<sup>(28)</sup>によれば、感覚〔あるいは記憶〕を介する経

験とそうではない経験との区別は承認されても、後者を「直観」ないし「知解」と同一視することは、初期の『規則論』から『省察』以降へというデカルトの思索の変遷を考慮に入れたとき、「経験」が包含する固有の機能を看過することになるゆえに不可能である。

「直観」について——『規則論』では「自らが存在すること、自らが思惟すること、三角形は三つの線によってのみ限界づけられていること、球はただ一つの面で囲まれていること、またこれに類すること」(*Regulae*, AT-X, 368.) が直観の対象とされているが、しかしそれらのうち数学的・幾何学的知の確実性は後の『省察』にて方法的懷疑によって棄却される (*cf. Med.*, AT-VII, 21.) ものである。そして自らの思惟や存在の確実性に関しては、『省察』「第二答弁」、『真理の探究』、『ピュルマンとの対話』では「直観する」とではなく「経験する」といわれているのであり、数学的知をも対象とする『規則論』の「直観」<sup>(29)</sup>とそれら後期著作の「経験」とを同一視することは、後者の確実性を、方法的懷疑によって棄却されることとなる数学的知の確実性と同程度のもののみならずことになり、それゆえ、「精神は自らが思惟することを経験できる」(*5ae Resp.*, AT-VII, 358.) や「彼自身のうちで、自身が存在するのでない限り思惟することはありえないと経験する」(*2ae Resp.*, AT-VII, 140-141.) といわれるときの「経験」の確実性を、形而上学において保持することは不可能となるのである。

加えて「知解」について——「知解」は、「三角形を想像するという場合、私は、それが三つの線によって包まれた図形であることを知解するだけではなく、同時にまたそれら三つの線をあたかも現前しているものであるかのように精神の眼によって見つめる」(*Med.*, AT-VII, 72.) という記述から理解されるとおり、対象の現前性をもたない。つまり「知解」だけでは、その対象そのものを「現前しているもの」としては捉えられないのであり、換言すれば、知解の対象は〈それそのものとして〉は現前していないのである。しかし他方で「経験」は、「いかなる対象も、感覚器官に現前していなかったならば、どれほど私が感覚しようと欲しても感覚しえず、反対に、感覚器官に現前していたときには、感覚すまいと欲しても感覚せざるをえなかった」(*Med.*, AT-VII, 75.) という記述から理解されるように、現前するものでなければその対象とすることはできない。『真理の探究』によれば、「経験」の対象である「私は思惟する」ことの確実性は、「私たち自身の経験によって」知られるのであり、このことについて、「全く目のみえない者に、白とは何であるかを解らせようとして、白の定義を与えても無駄であり、それを私た

ちが知るためには、目を開いて白いものをみるだけで十分である」と喩えられている。つまり、白の何たるかを知るためには実際に白いものをみる必要があるように、思惟の何たるかを知るためには、実際に思惟する必要があり、精神が「自らが思惟することを経験する」(5ae Resp., AT-VII, 358.) ということは、精神が「現実的に [actu] 思惟する」(2ae Resp., AT-VII, 151.) ことに他ならない。そして自らの思惟が現前している、すなわちそれが主体に対して強制力をもっているからこそ、「私たちは、常に、私たち自身のうちにおいて、自らが思惟することを経験しないということはありません」(6ae Resp., AT-VII, 427.) のである。

#### 4. 展望

以上の見解に基づくなら、デカルト的「経験」概念は、他の概念と代替されることなく、それ自体として究明されなければならないことが理解される。最後に、この概念がデカルトの哲学体系において有する機能を特定するための端緒を提示しておきたい——ある概念について哲学的に論究しようと試行するさいには、語彙論的調査に基づき用例・用法を分析することが有効な手段となるが、論者が「経験」という語についてこれを行ったところ、極めて興味深い結果が得られた。それはすなわち、以下に示すように、デカルトにおいて「経験」は、しばしば « *conscientia* [自覚/良心/意識] » という語と並置されるかたちで使用されているということである。

「[...] 私は思惟する事物に他ならないのであるから [...], 何かそのような [現にあるところの私が少し後にもまたある、という事態を設えうるための] 力が私のうちにあるとしたならば、それを疑いもなく私は意識\*<sup>(30)</sup> していることであろうから。しかし、何らそのような力があることを私は経験することはないのであって、まさしくこのことからいとも明証的に私は、私が自らとは別の存在に依拠しているということを認識するのである」(Med., AT-VII, 49.)

「ある種の人たちは [...], その [人間は精神をもたず高級な自動仕掛けである、という] 意見を変えるよりはむしろ、自分自身について常に自らのうちにおいて経験しないではいられないものを否定するようになるであろうということ、そのこと以外の何かを証明するための論拠ではない。[...] 獣は思惟しないということが彼に示されるに至っても、彼が

獸と同じ仕方<sup>・</sup>で活動するという意見を変えるよりはむしろ、自らにおいて意識<sup>・</sup>\*しないこと<sup>・</sup>の不可能な、あの自身の思惟さえも自らから剥ぎ取ることの方を選ぶであろう〔…〕(6ae Resp., AT-VII, 427.)

「私たちのうちにある自由すなわち非決定については事情が異なり、私たちはこれを、それ以上に明証的かつ完全に把握されるものがないほどにはっきりと意識<sup>・</sup>\*するのである。というのも、その本性上私たちには充實的に把握できないことが解っていることを私たちが把握しないからという理由で、私たちが内的に把握し、自らのうちで経験<sup>・</sup>する他のことをも疑うとすれば、それは不合理であろうから」(P.Ph., AT-VIII, 20.)

「さらにつけ加えると、これらのもの(=存在、思惟、懷疑)はそれ自体によってでしか知られえず、それらについては、私たち自身の経験や、各人がこれらを検討するとき<sup>・</sup>に自らのうちで経験<sup>・</sup>するところの意識<sup>・</sup>\*ないし内的証言によってでなければ納得することができない」(R.V., AT-X, 524.)

これらの引用から判明するように、デカルトは「経験」を「意識<sup>・</sup>\*」に対応させて使用しているのであって、両者のあいだに何かしらの関係性がある可能性が示唆されている。もっとも、先行研究によれば、「*conscientia*; *conscience*」という語に「意識」という認識論的ないし心理学的な意味が付与されるようになるにはラ・フォルジュやマルブランシュといったデカルト主義者たちを俟たなければならない<sup>(31)</sup>。しかし以上のテキストで示されている「経験」と「意識<sup>・</sup>\*」との関係性を分析することで、デカルトにおける「経験」概念の、同時に「意識<sup>・</sup>\*」概念の、先行研究では扱われてこなかった新しい側面を究明することが可能となるのではないか。

以上の問題群が、今後の研究課題となるだろう。

注

(1) デカルトに関する引用・参照は、René DESCARTES, *Œuvres de Descartes*, eds. Charles Adam and Paul Tannery, nouvelle présentation, 11 vols. (Paris: J. Vrin, 1964-1974) (ATと略記)に依拠し、書名の慣例的略号、巻数(ローマ数字)、頁数(アラビア数字)の順で示す。なお引用文における強調はすべて論者による。

(2) 『規則論』において、「事物の認識に到達する」「方途」として「経験」および「演繹」が、「欺かれることを懸念せずに事物の認識に到達しうる知性のすべての活動」として「直観」および「演繹」が挙げられる。Cf. *Regulae*, AT-X, 365, 368-9.

(3) W. H. HEINEMANN, "The Analysis of Experience," *The Philosophical Review* 50 (1941): 562.

(4) GREGORIĆ および GRGIĆ によれば、アリストテレスは「経験」を定義していない。Cf. Pavel GREGORIĆ and Filip GRGIĆ, "Aristotle's Notion of Experience," *Archiv für Geschichte der Philosophie* 88, no. 1 (2006): 1-30.

(5) *Ibid.*, 2.

(6) Cf. Peter KING, "Two Conceptions of Experience," *Medieval Philosophy and Theology* 11, no. 2 (2003): 8.

(7) Thomas AQUINAS, *Summa theologiae*, I, q. 54, art. 5 [ad 1].

(8) *Ibid.*, I, q. 117, art. 1 [corpus]. なおこちらの原語は « *experimentum* » であるが、少なくとも中世後期までは « *experientia* » と同義的に使用されていた。Cf. Katharine PARK, "Observation in the Margins, 500-1500," in *Histories of Scientific Observation*, eds. Lorraine Daston and Elizabeth Lunbeck (Chicago: University of Chicago Press, 2011), 38 [n. 4].

(9) Johannes DUNS SCOTUS, *Doctoris subtilis et Mariani Ioannis Duns Scoti ordinis fratrum minorum Ordinatio* (Civitas Vaticana: Typis Polyglottis Vaticanis, 1950). 邦訳: ドゥッンス・スコトゥス『命題集註解(オルディナティオ)第一巻第三区分第一部』(上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成』第十八巻所収、平凡社、1998年)。

(10) デカルトによれば、このような方法は、真理の発見には無益である。「論理学は、その三段論法も他の大部分の教則も、未知のものを学ぶために役立つのではなく、むしろ、既知のものを他者に説明する、あるいはそれどころか、ルルスの術のように、未知のものを何らの判断を加えることなく語るために役立つだけである」(*D.M.*, AT-VI, 17; cf. *Principes* [Préface], AT-IX, 13.)。

(11) Michel de MONTAIGNE, *Les Essais*, eds. Pierre Villey, Verdun L. Saulnier, et Marcel Conche (Paris: P.U.F., 2004).

(12) Cf. *Essais*, III, xiii, 1065.

(13) 直近の引用箇所でもンテーニュは「形而上学」という語を使用しているが、実際に形而上学的な議論が行われるのは『エッセー』第二巻第十二章「レーモン・スボン弁護」においてである。そこでは、神は矛盾律に拘束されず、永遠真理は神の創造物であるとするデカルトのいわゆる「永遠真理創造説」との関連が明確に認められる神学的見解が展開される。Cf. 津崎良典「西洋近世初期における神の力能に関する言説——モンテーニュからデカルトへ」筑波大学哲学研究会編『筑波哲学』20号(2012年): 68-81頁。

(14) Desmond M. CLARKE, "The Concept of Experience in DESCARTES' Theory of Knowledge," *Studia Leibnitiana* 8, no.1 (1976): 26.

(15) *Ibid.*

(16) *Ibid.*, 28.

(17) ただし、〈感覚を介する認識〉としての経験は、『規則論』期のデカルトにおいてはたしかに確認される。小林道夫が指摘しているように、『規則論』のとりわけ第十二規則におい

て展開される認識論では、主体の「外部感覚」が、それぞれの感覚対象の有する「形」を受け取り、次いでこの形を受け取った「共通感覚」が、それと同じ形を「想像力」のうちに刻印することによって認識が成立すると述べられているが、この見解は、感覚対象から形相を抽象することによって認識が成立するというアリストテレスの認識論と同一のものである。しかしデカルトは、同じく『規則論』で言及されている「普遍数学」、および、当書執筆中絶から数年後に記されたメルセンヌ宛書簡で提示される「永遠真理の創造」説の創案によって、伝統的な認識論を破壊することとなる。Cf. 小林道夫『デカルト哲学とその射程』（弘文堂、2000年）、5-7頁。小林によれば、「第一に、数学的真理が神によって人間知性の内に刻印されてあるということから、人間精神は、そのような真理を、感覚の対象からの抽象によることなく、また自らを超越してイデア界に赴こうとすることもなしに、生得観念として自らの内に認識しようということになる。第二に、そのような数学的真理と自然法則とが、それらの共通の作者として神を擁するということから、人間精神は、両者の間の対応を想定して、自らの数学的生得観念を素材として、自然法則の理論を構成しようということになる」（小林道夫、同上書、7頁、強調原著者）。そして、デカルトにおいて、このような認識論の変容に伴って、認識の中核となる「経験」概念そのものも変容したと考えられる。

<sup>(18)</sup> Cf. Denis KAMBOUCHNER, *Descartes n'a pas dit* (Paris: Les Belles Lettres, 2015), 66.

<sup>(19)</sup> Johann MICRAELIUS, *Lexicon philosophicum terminorum philosophis usitatorum* (Verlag: Freyschmid, 1653), 417.

<sup>(20)</sup> 「経験」を定義するにあたって当の「経験」という語が使用されているのは奇異に思われるが、ここでの「経験」とは、第一の「感覚」としての経験、および第二の「観察」としての経験から獲得されたものの記憶の集積、ないし日常的な経験を意味していると考えられる。

<sup>(21)</sup> Matthias MARTINI, *Lexicon philologicum* (Verlag: Goetzen, 1655), art. EXPERIENTIA.

<sup>(22)</sup> Étienne CHAUVIN, ed., *Lexicon rationale sive Thesaurus philosophicus* (Rotterdam: apud Petrum van der Slaart, 1692), art. EXPERIENTIA.

<sup>(23)</sup> 以下では、「physique」と「métagysique」と対比させるためにその訳語を「自然科学的」に統一するが、これは〈物理的〉、〈身体的〉、〈物質的〉を含む広義の意味で理解されたい。

<sup>(24)</sup> Cf. Nicolas GRIMALDI, *L'Expérience de la pensée dans la philosophie de Descartes* (Paris: J. Vrin, 1978), 100.

<sup>(25)</sup> Cf. Pierre GUENANCIA, *Descartes, chemin faisant* (Paris: Les Belles Lettres, 2009), chap. 2: « Les fonctions de l'expérience ».

<sup>(26)</sup> Cf. Denis KAMBOUCHNER, *Descartes n'a pas dit* (Paris: Les Belles Lettres, 2015), chap. 13: « La physique n'a guère besoin d'expériences ».

<sup>(27)</sup> KAMBOUCHNERの初期の著書である『情念の人間——デカルト註解』（1995年）では、「デカルトの経験とは、常に同時に、対象の所与の経験とその所与の知覚の経験である」と説明されている。これは註釈での補足的な記述にすぎないが、本研究に不可欠の視点である。これについては本稿「4. 展望」で言及する。Cf. Denis KAMBOUCHNER, *L'Homme des passions: commentaires sur Descartes* (Paris: Albin Michel, 1995), t. 2, 435 [n. 452].

<sup>(28)</sup> これ以下の記述は、田村 歩「デカルト形而上学における「経験」概念に関する考察——「直観」および「知解」との対照において」『哲学・思想論叢』36号（2018年）：130-142頁に基づく。

<sup>(29)</sup> 『規則論』の「直観」のみならず、『省察』の「直観」も後期著作の「経験」と同一視されえないことについては、cf. 田村 歩、同上論文、137-138頁。

<sup>(30)</sup> デカルトにおける「conscientia」は、伝統的な「良心」ともデカルト主義者たちによる心理学的な「意識」とも同一視されえない（本稿註釈31を参照）。区別するために、便宜上デカルトのものは「意識\*」と表記する。

<sup>(31)</sup> Geneviève RODIS-LEWIS, *Le Problème de l'inconscient et le cartésianisme* (Paris:

P.U.F., 1950), 111 sqq.; Catherine G. DAVIES, *Conscience as Consciousness: the Idea of Self-Awareness in French Philosophical Writing from Descartes to Diderot* (Oxford: The Voltaire Foundation, 1990), 1-21.

(たむら・あゆむ 筑波大学大学院一貫制博士課程  
人文社会科学研究科哲学・思想専攻)